

2022年5月 15 日 復活節第 5 主日礼拝

メッセージ「はっきり言ってすっきりしない!？」

岡嶋千宙伝道師

聖書 ヨハネによる福音書 10章 22-30 節

誰でも、一ヶ所か二ヶ所、あるいはそれ以上かもしれませんが、好きな場所があると思います。わたしにも、もちろん。しかも数多く。基本的に静かなところが好きで、最近のお気に入りには、京都、烏丸御池の裏路地にある小さな博物館、万華鏡ミュージアム。「最近の」といいながら、ここ 2 年ほど行っていませんが、世界各地から集められた様々な万華鏡が、十畳ほどの展示室で描き出す世界は圧巻で、我を忘れて、時間を忘れて、思う存分楽しむことができます。一つ一つの万華鏡の仕掛けや、覗き窓から眺める景色が違うことはもちろんですが、外見もそれぞれに特色があり、展示のされ方、組み合わせの仕方によって、ガラッと変わるその時だけの風景に触れる、というのも楽しみ方の一つです。複雑な仕掛けを持つものもあれば、単純な仕掛けのものもあって、最も感動するのは、仕組みが分かって、仕掛けを動かして、覗き穴からの景色が変わった瞬間。しかも、万華鏡ミュージアムは、展示室自体が一つの仕掛けになっていて、例えば、部屋の照明を調整することによって、同じ景色でも全く異なる色彩を帯びてくることもあります。見ごたえ満載。見方を変える。眺める立ち位置を変える。場所の空気感を変える。それによって、異なる景色が立ち現れてくる。あるいは同じ景色であっても、異なる色合いを持つようになる。聖書という書物、あるいは、聖書が語るイエスという人物もまた、万華鏡と同じなのかもしれません。見方を変えることによって、わたしたちの接し方を変えることによって、今までとは全く異なる現れ方をする。時に、これまで気づかなかったメッセージが伝えられるようになる。今日は、万華鏡をイメージしながら、与えられている御言葉に触れて見たいと思います。

まずは、簡単に場面設定を確認します。時代は今から約二千年前。場所は現在で言う中東パレスチナ地方の都市、エルサレム。イエスを含めた当時のユダヤの人々にとって、エルサレムは政治・経済・文化・宗教の中心地でした。時期は冬、12 月で、神殿奉献記念祭という大切なお祭りが行われていた時。パレスチナの各地から、お祭りのために多くのユダヤ人たちが集まっていました。イエスは、もともとはエルサレムから北へ 100 キロほど離れたナザレという田舎町出身です。それまでにも何度かエルサレムを訪れていて、そこでちょっとした有名人になっていました。他のユダヤ人たちと同じように、大切なイベントがある際にエルサレムに出

向いていて、その度に、当時の人々にとっての常識から外れたことを平気で言ったり、行ったりしていたため、名が知られるようになっていたのです。当時のユダヤ社会は、ローマ帝国による圧政のもとで、苦しい生活を強いられていました。人々は、その苦しみから解放してくれる指導者、救い主、メシアと言われる存在を待ち望んでいました。そのメシアであるかのような発言と行動をしていたイエス。ユダヤ人の中には、イエスこそがそのメシアであると期待する人たちもいました。ですが、特にエルサレムで社会の中心的役割を担っていた、政治家、役人、あるいは宗教指導者など、権力の中枢にいるような人たちにとって、イエスは、好ましくない存在でした。イエスのあり方、言動が、彼らの思い描くメシア像とは全く異なるものだったからです。メシアらしいことを言ったり行ったりしているけれども、どうも自分たちのイメージとは異なる。異なりすぎている。そんなメシアなら願い下げ。いなくていい。むしろ、邪魔。だったら、はっきりしてもらいたい。イエスという人物は自分たちのイメージ通りのメシアなのか。それとも違うのか。もし違うのなら、捕まえてこれ以上自分たちの邪魔をしないように排除してやろう。なんなら、殺したっていい。そんな思いを抱きながら、イエスを問いただす機会を狙っていたユダヤ人たちに、絶好のチャンスが訪れます。イエスが神殿奉獻記念祭のためにエルサレムに上京してきたのです。

「いつ聞くの?」「今でしょ!」ということで、イエスを取り囲んで詰問するユダヤ人たち。「はっきり言え!おまえはメシアなのか!」。イエスの答え。「何度も言ってるじゃないですか。あなたたちは信じようとしません。わたしの言葉だけじゃなくて行動でも、それを見たら分かるはずなのですが。」このやりとり、ちぐはぐしています。イエスとユダヤ人との間で、思いが通じあっていません。噛み合っていないのです。食い違いの理由の一つは、両者の間でのイエスという人物に対する理解の違いです。一方のユダヤ人たちは、自分たちの思い描く「メシア」という一つの窓からイエスを捉えようとしています。果たして、イエスはその窓の枠に当てはまる人物なのかどうか。他方のイエス。彼は「メシア」という一つの窓だけではなく、それを含めた、しかもユダヤ人たちの思い描くようなメシア像ではないあり方で、さらに「メシア」という窓以外の別の複数の窓を持ち合わせる存在として自分自身を開示しています。ユダヤ人たちは一つの見方、一つの景色にこだわります。万華鏡で言えば、仕掛けを動かさない。そもそも、仕掛けに気づいているかどうか微妙なところですが、気づいていたとしても、動かそうとしないのです。景色を固定化しようとする。他方のイエスは、万華鏡そのもの。あるいは、万華鏡の仕掛け。景色が固定化させることに抗います。

ヨハネ福音書全体において、イエスとは何者かということは大きなテーマとなっています。福音書の初めから終りまで、イエスは様々な呼ばれ方をされ、また、様々な仕方で自分自身を呼びます。周りの人たちからは、例えば「ラビ(先生)(1:38, 1:49, 3:2 など)」、「神の子(1:49)」、「イスラエルの王(1:49)」、「神のもとから来られた教師(3:2)」、「預言者(4:19, 6:14 など)」、「神の聖者(6:69)」、「世の救い主(4:42)」などと呼ばれています。他方で、イエスは、自分自身を「命のパン(6:35, 41, 48, 51)」、「世の光(8:12, 9:5)」、「門(10:7, 9)」、「良い羊飼(10:11, 14)」、「復活と命(11:25)」、「道・真理・命(14:6)」、そして「まことのぶどうの木(15:1, 5)」として人々に示しています。いずれも、イエスという人物を指し示す言葉として使われていますが、それぞれが異なるイメージと膨らみを持っています。どれもがイエスの一つの側面を表すものでありながら、どれか一つだけでは、イエスが何者なのかを言い表すには十分ではありません。どれか一つに固定してしまったのであれば、イエスの全体像がぼやけてしまい、誤ったイエス像が構築されることになるでしょう。そして、その像に基づいて、イエスが伝えようとしているメッセージが歪められてしまう危険性もあります。キリスト教の歴史を紐解けば、「イエスとは何者か」という問いをめぐって、大きな争いが繰り返されてきました。教会や、教会の後ろ楯となった国家、あるいは社会を二分化し対立を生じさせたこともしばしば。教義的な「イエス像」を保持することが優先され、一人一人の命がないがしろにされることもありました。自分たちの思い描くイエス像に固執し、イエスという万華鏡を、その万華鏡の持つ仕掛けを動かそうとしなかった結果、多くの人たちが苦しみ、命を落としていったのです。今見えている、あるいは自分たちが見たいと願うイエスの景色を維持しようと、こだわり続けたゆえに積み重ねられた負の歴史的遺産。

本日の 30 節にあるように、イエスは、自分と神とを結びつけて語ります。「父」と呼ぶ神について、イエスは「すべてのものより偉大である」(29 節)と伝えていきます。その神、イエスにとっての父は、ヨハネ福音書の冒頭プロローグの部分で、すべての始めにあり、万物を創造し、人に命を与え光で導く方とされています。この姿は、人の思いをはるかに超えるものであり、冒頭部分の詩的でとらえどころのないように感じる表現は、人とは全く異なる存在としての神の姿を見事に伝えていると感じられます。イエスは、その神と共に初めからあり、天地創造の業を神と共になした方でした。だから、人間が一時的に抱くイメージや人物像からはるかにはみ出て当然なのです。イエスは、人が抱く一つの見方に収まるはずがありません。イエスがこの場面で伝えようとしているメッセージ。それは、固定化の呪縛から解放

されることなのではないでしょうか。イエスの姿を、そして、イエスを通して神に愛され、神の手に委ねられている私たち一人一人を解き放っていく。イエスの姿、イエスを通して神と交わる私たち一人一人の存在は、もっと流動的で、動きに満ちたものであるはずです。29 節で、イエスが「誰も、自分と結びつけられた一人一人の存在を神の手から奪うことはできない」と語っているのは、固定化される神像、イエス像、あるいは人間像から自由になった者の姿を表していると考えられます。福音書 4 章において、サマリアの女性と語り合ったイエスが「決して渴くことのない永遠の命に至る水」と語っていたのは、そんな流動的な、動きに満ちた自由な存在を、そして、その存在同士が築くダイナミックな関係性を、イエスが与えてくれることを表しているのです。

今、わたしたちが生きている世界。集っている教会。あれかこれか、どちらか一つにはっきりさせる。曖昧さをなくしていく。分かりやすく、すっきりする答え、正解を求める。人間である以上、その傾向をなくすことはできないのかもしれませんが。ですが、一つのイエス像、一つの神像だけが維持されるようになっているのだとしたら。ある一つの側面だけを切り取って、そこにこだわり続けるのだとしたら。自分たちの抱くイエス像を、信徒像を、教会像を守ることに必死になってはいないでしょうか。それによって、今、隣で苦しんでいる人、もがいている人、生きづらさを感じている人、行き詰まって身動きがとれなくなっている人、声をあげることができなくなっている人、命の灯が消えかかっている人、そんな人たちの存在に気づけなくなっているのではないでしょうか。世界全体が、日本社会が、わたしたちの住む地域が、様々な理由で閉塞感に満ちている今だからこそ、自分たちのあり方を見つめ直す必要があるように思えます。死からの復活という、人間の常識からすると、あり得ないことを成し遂げ、人間世界のあらゆる束縛を打ち破ったイエスと共に、万華鏡の仕掛けを動かす。そして、自分たちがこれまで見てきた景色を変えていく。別の色を、別の光を、別の形を、別の影を、取り入れてみる。その先に見る景色を待ち望み、造り上げていく。容易ではないかもしれませんが。でも不可能ではありません。イエスがそれを望んでいるのですから。教会とは、そのために、イエスがこの世に建てられた場なのです。まずは隣にいるあの人を。そして自分自身を。新しい角度から眺めてみる。その人に対して、自分自身に対して抱いていた見方を変えてみる。固定化されたイメージから、隣人を、自分自身を解放する。皆さんと共に、わたし自身が変えられ、その変えられた姿で、新しくイエスと出会い直すことを願います。